

## 3B-2

## 明治期における情報と状報

小野 厚夫

神戸大学 教養部

今日ほど情報という語が多用されている時代はない。しかしながら、肝心の情報という語がいつごろから、どのような形で使われたのか、必ずしも明白でない。そこで、改めて情報という語の由来を調べてみた。

情報という語は中国でも使われているが、中国人自身が日本来源の中国語として認めており、漢語ではなくて和語とみなすことができる。また国語辞典に情報が現われるのは明治三十八年以降のことで、情報は明治になってから現われた語ではないかと考えられる。

これまでの通説では、文豪である鷗外森林太郎が最初に用いたとする、鷗外造語説が有力であった。しかし、この説についてはすでに疑問とする見方もある。我々は明治期の情報の用例を調べて、兵語に由来することをつきとめ、兵書を重点的に調べた結果、鷗外が文筆活動を始める以前の明治九年に、既に情報という語が使われていることを見いだした。また明治十年代後半には、情報だけでなく、状報も並行して用いられていたことがわかった<sup>(1, 2)</sup>。

明治十五年三月二十日の陸達乙第十八号により陸軍省が制定した『野外演習軌典第一版』では、情報という語が多数用いられている。公式文書に情報という語が現れるのはおそらくこれが最初であろう。

この野外演習軌典は、明治九年に陸軍少佐酒井忠恕がフランスの実地演習軌典を訳出した『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』<sup>(3)</sup>を土台にしており、この訳本ではすでに情報という語が使われている。これ以前に出版されている兵書を調べても情報という語が見あたらないことから、おそらくこの本が情報という語が使われた最初の出版物ではないかと考えられる。

当時、陸軍が兵式をフランス式にすることに決めたことにともなって、兵学寮の教授たちがフランス軍の兵書や典範令を多数翻訳し、士官の教育や兵卒の訓練に用いた。一八七五(明治八)年にフランスで新式の歩兵陣中要務が刊行され、酒井がこれを翻訳して明治九年十月に内外兵事新

聞局から発行したのが『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』である。

訳者である酒井忠恕は嘉永三年の生まれで、旧名を鳥居八十五郎といい、田安殿家老越前守の養子である。慶応元年に横浜表に創設された仏学伝習所の第一回伝習生徒としてフランス語を学び、その後開成学校の三等教授を経て、明治二年八月に兵部省に出仕し、上等通弁から兵学大助教、同少教授に昇任、明治六年に陸軍少佐になった。六年六月から十二月まで伝令使を勤めている。

明治十二年に参謀本部に移り、十月に文庫課長、同十二月に翻訳課長となり文庫課長を兼任した。同十三年二月、同県に同姓名の者がいることを理由に改名を届出で、酒井忠恕から酒井清に改名している。同二十二年に陸軍省に退職を願い出、予備役に編入され、同三十年六月に死亡した。

酒井は明治九年に『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』を出版後、十四年に清名でその改訂版を発刊し、さらに十五年に『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典抄』を訳出している。最後の『實地演習軌典抄』は問答集であるが、この中で、情報に意識を付けており、これらの添え書きから、情報を「敵情(状)のようす、または知らせ」という意味で用いていることがわかる。したがって、情報は「情状の報告、または報知」を短縮したものと解釈することができる。

野戦では斥候、偵察、間諜などを派遣して地勢や敵情を調べる。その報知を酒井は情報と訳した。その原語についてはまだ原本を確認していないが、つぎに述べる理由からフランス語の *renseignement* と考えられる。

(1) フランス語を主体として編集されている『五國対照兵語字書』には *information* が採録されていない。(2) 明治十八年に訳出された『佛國陣中軌典』では、情報に「ランセギュマン」または「ランセギウマン」の添え書きがしてある。(3) 一八九五年の『仏國陣中軌典携帯版』の原本では *renseignement* が対応している。(4) 後述する『佛和辭典』の *renseignement* の項に状報が記載されている。

軍隊では命令は上から下へ流されるが、逆に情報は下から上へ伝達される。したがって野外演習では、兵卒に命令

The Japanese word "jōhō" in the Meiji era

Atsuo ONO

College of Liberal Arts, Kobe University

と情報を明瞭に、しかも確実に伝達することを習慣づけることが一つの重要な課題になっている。命令と情報は、いずれも伝達するさいに増減なく伝えることが要求される。

ここで注意すべきことは、従来あった諜報と区別して情報が使われていることである。歩哨のように、公然と軍服を着用して任務に従事している者は間諜とはみなされず、したがって、彼らが職務上見聞した地形や、敵の動きをしらせる情報は諜報には該当しないのである。

得られる情報には虚報や誤報が入り混じる。また、どうしても主観が入りやすい。そこで『野外演習軌典』では、情報を三分して、実際に見たこと、伝聞したこと、想像されることを区別して報告するように指導している。一方、報告を受ける上官は、次に情報を伝送する前にできるだけ複数の者から情報を得て、それらを対照し、その確度を検察することが要求される。緊急の場合には、明確に情報を伝えるために、偵察した者や、その情報をもたらした者を直接差し向けなければならない。

明治十一年に、酒井は『佛國參謀須知』を訳出しているが、この中で情報が一度だけ現われる。即ち、折り込まれた図に、偵察の報告書式が示されており、そこに「通過セシ地統計上ニ係ル情報及ヒ細解」という項目がある。

明治十五年に『野外演習軌典』が制定されるまで、情報という語が用いられているのは酒井の二つの訳書だけで、情報という語はあまり普及しなかったものと見てよい。

明治十四年二月に参謀本部から出版された『五國對照兵語字書』は、明治になって最初にまとめられた兵語辞書であるが、これを総括したのは西周である。オランダ將校が出版した仏・独・英・蘭の四方国語対訳兵語辞典を基にして、これに日本語が付加されている。しかし、この兵語字書には情報という語は一度も現われてこない。

この辞書に情報という語が見あたらないことから、長山泰介は当時情報という語はなかったと判断して、鷗外造語説を唱えた。<sup>(4)</sup>しかし、情報という語はすでに酒井によって使われており、西周らが情報という語を採用しなかったと見るべきであった。

#### 参考文献

- (1) 小野厚夫『明治九年、「情報」は産声 — フランス兵書の翻訳に語源』(日本経済新聞、平成二年九月十五日朝刊)
- (2) 小野厚夫『明治期における「情報」と「状報」』(神戸大学教養部紀要「論集」第47号、平成三年)
- (3) 酒井忠恕訳『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』(内外兵事新聞局、明治九年)
- (4) 長山泰介『情報という言葉の起源』(「ドキュメンテーション研究」第三十三卷四三一頁、昭和五十八年)
- (5) 大島進『鷗外森林太郎による獨逸語 Nachrichten の二つの翻訳語「情報」と「状報」』(「情報処理学会」平成二年度前期全国大会講演)

情報という語は、『野外演習軌典』が制定された明治十五年から兵書で一般的に使われだしたが、それと同時に状報という言葉も使われ始めている。しかし、状報が目につくのは明治二十年頃までで、その後はほとんど現れなくなってしまった。

明治十五年から二十年にかけて出版されている兵書を見ると、情報と状報はかなり混用されている。情と状はどちらも「ありさま、ようす」という意味を共通にもっており、現在でも混用されていることが多い。当時の兵書で実際の用例を調べてみると、情報と状報の使い方に差異はほとんど認められない。したがって、当時情報と状報はほぼ同義語として、併用されていたとみなすことができる。

明治二十年に合本出版された中江兆民校閲の『佛和辞典』を見ると、renseignement の訳語の中に状報が現われる。情報と状報を同義語とみなせば、情報という語が辞書に現われるのはこの仏和辞典が最初ということになろう。

明治十四年に『五國對照兵語字書』を編纂後、陸軍は兵式をフランス式からドイツ式に切り替えた。また時勢の変化によって次々と新しい機器や、新しい語が現われてきたため、明治二十年頃になると、参謀本部や、陸軍大学校で兵語を再検討する動きがでてきた。このような兵語検討作業のなかで、情報と状報は情報に一本化されたようで、明治二十年を過ぎると状報という語が現われる頻度は急減してしまう。

鷗外は『戦論』で同じ Nachricht を情報と状報の二通りに訳しているが、鷗外が文字にうるさいことは有名な話であり、二語を意識的に使い分けたとみるのが自然であろう。これについては大島進<sup>(5)</sup>が既に指摘済みである。

兵書における明治期の用例をみると、情報はありのままのようす、ありさまのしらせを意味することが多く、現在の情から受ける語感からすれば、情報よりも状報の方が適切だったように思われる。

この研究は技術士大島進氏の示唆によるところが大きい。調査を進める段階で大島氏にいろいろ助言、協力をいただいた。